

## P1-037

### 学校における手首式血圧計の活用に関する検討

佐藤 伸子<sup>1</sup>、田上 七海<sup>1</sup>、大野 結貴<sup>1</sup>、  
福田 博美<sup>2</sup>、目黒 亜香音<sup>2</sup>、朝原 万尋<sup>2</sup>、  
小川 真由子<sup>3</sup>、山田 玲子<sup>4</sup>、葛西 敦子<sup>5</sup>

<sup>1</sup>熊本大学、

<sup>2</sup>愛知教育大学、

<sup>3</sup>鈴鹿大学、

<sup>4</sup>北海道教育大学、

<sup>5</sup>弘前大学

#### 【背景・目的】

学校で救急処置や児童生徒の保健管理を行う養護教諭には、的確なフィジカルアセスメントを実施することが求められている。しかし、先行研究で血圧測定を実施する養護教諭が少ないことが把握されており、循環状況を判断する視点として重要な血圧がアセスメントされていない実態が示唆された。その背景として、日本高血圧学会が推奨している上腕血圧は、衣服を除いた上腕へ血圧計を装着しないと測定できないことで、他のバイタル項目と比べ手間がかかることや、養護教諭が血圧値を判断材料として重要視していない可能性が伺える。本研究では、上腕血圧より手軽に値を得ることのできる手首血圧について、3種の血圧計を用い、その測定値を上腕血圧計の測定値と比較することにより、保健室での活用の可能性を検討することを目的とした。

#### 【研究対象・方法】

対象は、3大学の養護教諭養成課程学生ら35名（A大学9名、B大学5名、C大学21名）であった。血圧は、仰臥位と椅座位で測定した。測定にあたっては、いずれもその体位で10分間の安静をとった後、上腕血圧と手首血圧をそれぞれ2回ずつ測定した。手首血圧は、機種A（手首式血圧計）・機種B（ウェアラブル血圧計）・機種C（スマートウォッチ）の3種で測定を行った。なお、各測定の間隔は1分以上を確保した。

#### 【結果と考察】

上腕血圧計により得られた収縮期血圧と拡張期血圧を基準として、3機種の測定結果をそれぞれ比較した。仰臥位では、機種Bと機種Cの値と上腕血圧の間で有意差がみられたものの、機種Aの値と上腕血圧の間では有意差がみられなかった。椅座位では、収縮期血圧について機種B、機種Cと上腕血圧の間で有意差がみられたが、拡張期血圧においては全機種で上腕血圧値との有意差がみられた。この結果より、養護教諭がフィジカルアセスメントを行う上で、手首血圧を測定することは、機種Aを用いることで、収縮期血圧において信頼できる値が得られることが伺えた。但し、機種Aは、測定部位の手首周が13.5～21.5cmと適用範囲が示されており、利用できる対象が限定される。その範囲外の児童生徒については、上腕サイズに応じたカフを用いて上腕血圧値を得ることが望ましい。

本研究はJPSS 科研費 20H01690、21K02621 および 21K02813 の助成を得て実施した。

## P1-038

### 高校生が学級担任に求める日常的な「会話」と「共有活動」の内容

井村 亘<sup>1,2</sup>、難波 知子<sup>3</sup>、橋本 実来<sup>4</sup>

<sup>1</sup>川崎医療福祉大学 医療技術学研究科 健康科学専攻 博士課程後期、

<sup>2</sup>玉野総合医療専門学校 作業療法学科、

<sup>3</sup>川崎医療福祉大学 医療技術学研究科 健康科学専攻、

<sup>4</sup>川崎医療福祉大学 医療技術学研究科 健康体育学専攻 修士課程

#### 【目的】

高校生の時期は、他者との比較や理想自己との比較が過剰になる時期であり、学校での日常生活を共にする時間の長い担任との関係性は、精神的健康の維持増進にとって重要である。本研究は、両者の良好な関係性の構築に資する知見を得ることを目的として、高校生が担任に求める日常的な「会話」と「共有活動」の内容を明らかにする。

#### 【方法】

研究デザインは、横断的な質的記述の研究とした（所属施設の倫理審査委員会承認）。対象は、普通科高等学校2校に在籍する1～3年生、452名であった。設問内容は、授業や部活動以外のフリーの時間（休憩時間や放課後など）に担任に求める「会話」と「共有活動」の2問である。分析は、記述内容を内容的類似性に基づいて分類し、カテゴリを生成した。分析は、2名の研究者で協議確認しつつ信頼性を担保した。申告すべき利益相反はない。

#### 【結果】

文中「カテゴリ（コード数）」を示す。担任に求める日常的な「会話」は、522コードから、[進路選択（125）]、[趣味・嗜好（122）]、[授業・学習内容（77）]、[プライベート（33）]、[悩み相談（25）]、[学校生活（20）]、[身の回りの出来事（20）]、[部活動（18）]、[身の回りの人間関係（16）]、[冗談事（14）]、[大学・職種（9）]、[将来像（9）]、[社会での出来事（9）]、[学習方法（7）]、[人生論（7）]、[愚痴（5）]、[学力（2）]、[自慢話（2）]、[先生の人生経験（2）]の19のカテゴリが生成された。一方、「共有活動」は、253コードから、[スポーツ（89）]、[趣味（59）]、[勉強会（42）]、[レクリエーション（29）]、[ボランティア（10）]、[課外活動（8）]、[進路調べ（6）]、[先生の手伝い（6）]、[掃除（4）]の9のカテゴリが生成された。

#### 【考察】

教師は学習支援だけではなく、心理的援助者としての役割も担っている。とりわけ生徒に近い立場にある担任との日常的な会話や共同活動は、両者間に社会的相互作用を成立させる行為である。そのため、今回、生成されたカテゴリを活用した関わりをもつことで、生徒と担任の良好な関係性の構築に寄与するものと推測できる。今後、これらのカテゴリが、高校生の精神的健康にどのように影響を与えるのか、実証的な検討が必要である。